


## 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 久野量一 

学位申請者 阪本佳郎

論文名 生涯としての〈詩〉 ——シュテファン・バチウの〈郷愁〉と詩の親密圏——

### 結論及び審査の経過

阪本佳郎氏から提出された博士学位請求論文「生涯としての〈詩〉 ——シュテファン・バチウの〈郷愁〉と詩の親密圏——」について、論文審査と口述審査による最終試験の結果、審査委員会は満場一致で博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論を得た。

阪本佳郎氏の指導委員をつとめていた今福龍太（主任指導）、中山智香子（副指導）、久野量一（副指導）の三名にて2019年10月30日に予備審査を行ない、学位請求論文の内容をめぐる詳細な質疑応答ののち、若干の修正を施したうえで論文提出と最終審査への手続きに入ることが認められた。最終審査に当たっては、学内から前田和泉、学外から松浦寿夫の2名をあらたに審査委員に加え、久野量一を主査として5名による審査委員会が構成され、2020年1月28日に公開審査が行なわれた。

### 論文の概要

阪本氏の論文は、シュテファン・バチウという、ルーマニアに生まれ亡命を生きた流謫の詩人の生涯、そしてその文学作品が、今日、いかに無視できない意義を持っているかを問うものである。バチウの生涯は、20世紀という災厄に伴う離散と越境に特徴づけられた歴史に対して、文学がいかに固有の生に大きな力を与えるのか、その洞察にむけて重要な価値をもつ。亡命の境涯の中で、世界文学的とも言えるような大きな射程を持ちつつも、既存の文学市場からは離れ、小さく、個人的で、細やかな日常に根ざした「詩の親密圏」とでもいうべき連帯のネットワークの創造がバチウによって果たされていることを、筆者は強調する。そのネットワークには、歴史から放擲され、忘れ去られた数多くの詩人たちの声が世界各地より集結し、響き渡っていた。

シュテファン・バチウは1918年にルーマニア、ブラショフに生まれた。戦間期、弱冠17歳にて国を代表する文学賞を受けるなど、若くして著名な詩人となった。しかし第二次世界大戦の動乱、その後の共産主義体制の圧殺を逃れてルーマニアを脱出、妻ミラとともに世界各地を彷徨い旅することになる。最初は、スイスに大使館付広報官として赴任するも、すでに東側陣営に入っていたブルガリアへの転任を命じられこれを拒否、ヨーロッパ大陸から逃れ、政治難民としてブラジルへと亡命した。困窮に喘ぎつつ、亡命先で出会った友人たちに助けられ、バチウはブラジル近代詩のなかに自らの地歩を定める。影響力ある日刊紙トリブーナ・ダ・インプレンザの記者

として、文学と国際情勢に関する記事を執筆、ラテンアメリカ各地を巡り歩き、名だたる政治家や外交官、詩人や作家と協力し、各国の軍事独裁政権に対する抵抗運動を支援する論陣を張った。1962年には、シアトルのワシントン大学でのラテンアメリカ文学・文明の教授職に招聘されて渡米。そのブラジル不在の間に、カステロ・ブランコ将軍による軍事クーデタが発生し、バチウはリオへの帰国を断念し、代わりにハワイ大学から同様のポジションにて招聘され、それを受け入れることにした。太平洋を渡り、以後ホノルルにて約30年もの歳月を過ごし、この太平洋の群島の一角にて客死。その間、詩、自伝、伝記、文学評論、政治評論、合わせて100冊以上を出版し、新聞記事は、ルーマニア、スイス、ラテンアメリカ各国、そしてハワイにおいて書かれたものを総計すると5000をも越える。これらの詩や文学作品は、長き亡命の生涯における、失われた場所や朋友たちとの数々の記憶、物語、それらへの痛切な郷愁によってできている。その郷愁の対象たる「祖国」とは、決してルーマニアのことのみを指すのではなく、遍歴のうちに獲得され、また失われた記憶、物語のアッセンブラージュであり、彼に生を再び生きせしめる詩の王国のことであった。

以下、本論文の目次を示した上で、章を追いながらその内容を概観する。

## 序

### 第1部 追想的評伝 —— シュテファン・バチウの詩の生涯とその〈郷愁〉

第1章 追想的評伝——Aquí yace la espuma 「潮の泡はここにたたずみ」

第2章 ルーマニア—ブラショフ 1918-1937

第3章 ルーマニア—ブカレスト 1937-1946

第4章 スイス—ベルン 1946-1949

第5章 ブラジル—リオ・デ・ジャネイロ 1949-1962

第6章 アメリカ—シアトル 1962-1964

第7章 ハワイ—ホノルル 1964-1993

### 第2部 MELE-International Poetry Letterとシュテファン・バチウの「詩の親密圏」

第1章 MELE-International Poetry Letter: 自由・真実・行動・革命としての詩

第2章 オウィディウスの末裔たち

——ヴィンティラ・ホリア、アンドレイ・コドレスク

第3章 ウルムズの「寓話」のもとで、ルーマニア・アヴァンギャルドの系譜

——ミラ・シミアン・バチウ、ヴィクトル・ヴァレリウ・マルティネスク

第4章 交感の時、亡命の詩人・芸術家とハワイ先住民の詩

——ジャン・シャルロ、ドロシー・カハナヌイ、ダリル・ケオラ・カバクンガン、ジョン・シャルロ

第5章 新たに言語を発芽させる種としての詩

——ラリー・カウアノエ・キムラ

第6章 リオ・デ・ジャネイロへのアロハ、路上の石に秘めたサウダージ

——カルロス・ドウルモン・ジ・アンドラーヂ、バッサ・マイ・ファム・ラー  
ション

第7章 群島を行き交う希求の手紙

結論 生涯としての〈詩〉、『千を越える四行詩』

おわりに

第1部では、バチウが移り住んだ土地ごとに章を7つに分け、それぞれにおけるバチウの生を評伝的に描き出す。そこでは大きく二つの目的が提示される。一つは、バチウの遍歴の生涯における〈郷愁〉の連続と変遷のあり様を明らかにすること。もう一つは、移り住んだ土地々々で出遇い、詩をともにした朋友たちとの関係性を浮かび上がらせることである。どちらも、バチウが好んで用いる二つの至言、“praf și purbere”「全ては埃塵に帰す」（ルーマニアの諺言）と“Aqui yace la espuma”「潮の泡はここにたたずみ」（ホルヘ・カレーラ・アンドラーデ）という言葉に象徴される。過去の物語は、灰や塵、海の泡のごとく無為に帰ってしまうものの、その姿が記憶として立ち現れ消えてゆく刹那の間には、一つの結晶として凝固し、再び過去を生きせしめる力をもつ。それがバチウにとっての、追想であり、詩の瞬間であった。その生涯を貫く〈郷愁〉の詩学を描き出すために採用されたのが、その詩的な「想起」の運動そのものをとりあげる方法だった。バチウのメモワールや他の自伝的記述を縦系に、流謫に伴う喪失と孤独から生まれた詩群を緯系にして、ときに複数の挿話が時系列を離れて交錯する叙述に依りながら、その詩的郷愁の生涯を織り上げることが試みられている。

そのときの叙述の地柄となるのは、20世紀という歴史である。ここで上の至言は更なる意味をもつことになる。離散を余儀なくされた人々の「舞い散る埃」や「潮の泡」のような儂き生を、バチウはその「自伝」で豊かに表現した。それは、自らについてのみ書くものではなく、亡命各地で出遇い親交を深めた、歴史に蹂躪された詩の朋友たちの群像劇のようなものへと近づいていった。

第2部においては、バチウの詩の生涯において最も重要な試みの一つ、詩誌「MELE-International Poetry Letter」に焦点をあてる。第1章はイントロダクションである。詩誌「MELE」は、バチウがホノルルにたどり着いた直後の1965から没後の1994年まで、ハワイから世界各地へと送りだされた詩誌である。手刷りの一見粗野な、きわめて限られた発行部数の小さな文学誌にも関わらず、「MELE」は世界中から幅広い詩人、アーティスト、劇作家たちの作品を掲載していた。International Poetry Letter「詩の国際便」の副題にもあるとおり、バチウは、その遍歴の途上、あらゆる土地において出遭った作家や詩人、芸術家たちと手紙を交換し、そのやりとりの中で作品を募った。全90号には、400人を越える寄稿者が30もの言語で寄稿し

ており、メキシコのノーベル賞詩人オクタビオ・パス、ブラジル近代詩の中心マヌエル・バンデイラ、ニカラグアのエルネスト・カルデナルら、多くの文学史上重要な詩人たちが寄稿していた。また地元ハワイの数多くの詩人や作家たちが参加しつつ、そこには大学でのバチウの学生や小学生の作品も交じるなど、この「詩の親密圏」は職業的詩人に留まらず広く一般にまで開かれていた。さらに、ルーマニアから亡命した詩人や作家たちがディアスポラ的精神を共有し、祖国を回顧する場を提供してもいた。例えば、バチウの高校時代の師であったエミル・チオランや、深い親交のあったウジェーヌ・イヨネスコ他数多くの亡命作家である。一方、ルーマニアに残った抵抗詩人たちにも、「MELE」は作品を発表するプラットフォームを提供した。「MELE」の果たした大きな役割の一つに、災厄の20世紀において虐げられ、黙殺され、放擲された詩人たちの声をすくい取るという、文学的アジールのような役割が挙げられる。

第2章「オウィディウスの末裔たち」では、ルーマニアの亡命詩人たちに共有された、難破者の始原的範型としての「オウィディウス」を介した集合的歴史意識について、ヴィンティラ・ホリアとアンドレイ・コドレスクを取り上げながら論じている。

第3章「ウルムズの『寓話』のもとで」では、ルーマニア・アヴァンギャルドの祖とされるウルムズを中心としたルーマニアの前衛詩人たちの「反抗の詩学」について、ウルムズ、ミラ・シミアン、ヴィクトル・ヴァレリウ・マルティネスクを取り上げ論じている。

第4章「交感の時、亡命の詩人・芸術家とハワイ先住民の詩」では、亡命の終着地ハワイにおけるネイティヴ・ハワイアン知識人と移民の芸術家との「MELE」を拠点とした詩的交感を論じる。とりわけ、ネイティヴ・ハワイアン知識人との共同のもと為されたジャン・シャル口のハワイ語の劇作とその壁画、またその息子ジョン・シャル口によるハワイ語のテキストを具体的な素材として取り上げている。

第5章「新たに言語を発芽させるための詩」では、1970年代前半から始まるハワイの文化復興運動に言語教育者として大きく貢献した「ハワイ語の祖父」ともよばれるラリー・カウアノエ・キムラから「MELE」へ寄せられたハワイ語詩を扱い、その失われつつある言語を蘇らせようという、植民地主義へのコスモ・ポリティカルな抵抗の試みについて論じている。

第6章「リオ・デ・ジャネイロへのアロハ、路上の石に秘めたサウダージ」では、ブラジル時代の盟友カルロス・ドゥルモン・ジ・アンドラージの詩「道の真ん中に」の特集号から、バチウと、バツハ・マイ・ラーションというベトナムからきた女学生のあいだに偶発的に生じた、ドゥルモン・ジ・アンドラージの詩をめぐる交感と郷愁の物語について論じている。

第7章「群島を行き交う希求の手紙」は、第2部のまとめとして、「MELE」を舞台とした「詩の親密圏」が、いわゆるグローバルな文学市場をもとにある一つの世界性を想定するような世界文学の公共圏とは、まったく異なる原理で成されていたことを明らかにしつつ、その多なる世界の交響たる文学のもつ価値を打ち出し結論づけている。20世紀という歴史に流涕を余儀無くされた詩人たちの反抗の詩学が、個々の詩と詩を結んでいくつものヴァリエーションを

もちつつ「MELE」を焦点にして集散した。第二部の目的は、その一つ一つの関係性をもつ潜勢力を示すことにおかれていた。

最後の「結論」では、詩をもって遍歴を生き抜いた詩人が最後にその道行きを振り返って書いた、生涯の総括とも言える詩集『千を越える四行詩』Peste o mie de catrene に焦点を当てている。老いた詩人は晩年に思い出される若き日々を、ルーマニアの伝統的形式たる短詩、「四行詩」catren を書くことによって再び生き直そうとした。その背後には、死という自らの喪失に際し、自己存在が世界へと溶解していく過程のなかで、詩はより物質的時間の永遠へと向かっていくことへの信にあった。その郷愁と死の汀の境域に浮かび上がり、四行詩の短い言葉の間に垣間見える<詩としての生涯>が最後に明らかにされている。

以上を通じて、ある固定的な文学空間や文学市場の公的な場において流通・認知されずとも、世界にしかと存在し、ささやかでもその片隅と片隅とを行き交う言葉のもつ力が証されてゆく。そうした親密かつ苛烈な文学空間・時間の意義を提示することが本論文全体の企図である。

### 審査の概要及び論文の評価

冒頭に記したように、審査委員会による論文審査を経て2020年1月28日に最終試験（口述）が13時00分より15時15分まで、学内にて公開で行われた。

まず、阪本氏の論文が、シュテファン・バチウというルーマニアに生まれ亡命を生き抜いた流謫の詩人の生涯と作品を世界で初めて本格的・包括的に論じた、未開拓の分野に挑む意欲作であることが審査委員全員によって高く評価された。そしてそれが、一人の亡命詩人の生が20世紀という災厄に伴う離散と越境に特徴づけられた歴史において、「詩」の創造と「詩」を媒介にした文学的共同性の創造という二つの側面において、いかに大きな力をもちえたのかを洞察するすぐれた論考であることも一致して評価された。

バチウの自伝的な著作を精緻に解説し、それを踏まえた本格的「評伝」としての価値はいうまでもなく本論文の基本にある。だがそれとともに、バチウの周囲、とりわけ彼がハワイに移ってから四半世紀のあいだ刊行し続けた雑誌「MELE- International Poetry Letter」に集った詩人群像のなかに人間と文学思想の相互をつなぐ新しいネットワークを発見してゆく叙述の展開も、本論文の非常に刺激的な部分である。バチウの伝記的事実や、離散詩人たちの交友を論じる際に採用されている「想起」や「郷愁」という分析的キーワードをめぐる主題的分析においても、本論文は的確で周到な記述がなされている。

こうした論文全体に対する総合的に高い評価をもとに、さらに下記のような個別のテーマ、主題における本論文の達成について、審査においてさまざまなコメントや質疑応答がなされた。

#### (1) 「詩の親密圏」

バチウの周囲に奇蹟的に成立した、詩と詩人たちの共有する言葉と精神の共鳴体をあらわす著者によるあらたな概念であり、その理論的概念としての有効性は疑いない。文学的な言説が市場経済の原理のもとに統合されてしまった現在において、阪本氏の言う「詩の親密圏」や

「詩の贈与経済」といった考え方が、世俗的な商品へと還元されてしまう文学の窮地を超えて、ことばの尊厳や恩寵をあるがままに表明し、無償の場において贈与・交換しあう可能性を探ることを促す。これは、これからの文学研究の方向性として重要であると考えられる。

## (2) 「対抗的世界文学」

「世界文学」なる概念が、ポスト植民地主義状況下の流動的なアイデンティティを基盤とする脱-国籍的、通-言語的文学実践と、資本主義下のグローバルな言語生産・流通・消費の運動を前提に定立された概念であるとすれば、本論文の指向性は、そうした「世界文学」が成立する言説圏・公共圏の内部ではなく、固有の生そのものの流転や屈折を証す「ことば」自体が依って立つ存在論的な価値や美、尊厳をもとにして、そこからテキストが生み出されてくる地平を探究しようとしている点で、現代の文学研究の中心的な潮流にたいして、きわめて刺激的な批判と提言を行なっていると考えられる。著者は、バチウをめぐる「詩の親密圏」を「前-境界的」なものとして捉えているが、これは「越境的」という文学研究のクリシエに依ることなく、「境界」の存在を規定的に捉える文学空間をめぐるアイデンティティ・ポリティクスそのものから離脱しようとする、果敢な思考であると考えられる。

## (3) 「精神地理学」

バチウの「郷愁」をめぐるさまざまな詩作品の分析は本論文の白眉である。その郷愁が向けられる「祖国」はもはや特定の国家や地理的テリトリーではなく、ユートピア的な精神領土であり、流亡の過程のなかで詩人たちとの交流から生じた「MELE」というネットワークが映し出す記憶と希求の星座、あるいは群島であった。それを著者はバチウ独特の「精神地理学」の表明であると刺激的に規定している。線形的な歴史の時間と、既存の地図的な空間認知から離れたテキストの読解可能性を示唆する、意欲的な視点であると思われる。

## (4) 「投壘通信」

バチウの詩的実践を、パウル・ツェランのいう「投壘通信」という比喻のもとに捉える視点はきわめて有効であると思われた。さらに、阪本氏みずからの論考が、バチウからの投壘通信を偶然受けとることになった著者自身の「返信」の手紙であるべきである、という確信が、この論考の構成や文体を決定づけている。従来の作家の生涯をめぐる実証研究、その作品のテキスト分析、批評理論の援用、といった方向へ論文を純化させるのではなく、多方向的で混淆的な叙述スタイルを最後まで貫いた、その方法論的・思想的意を評価したい。

こうした肯定的な評価の一方で、最終審査においては、阪本氏の論文に対する質問や疑問も提起された。たとえば、伝記と分析とによる二部構成による叙述が、厳密な意味での学術論文の形式からみたとときに問題はないか、「詩」に関する考察を「散文」によって行なうことの困難やアンビヴァレンツに耐えうる論文となっているか、断片的な数々の記憶を詩を媒介に「収集」する行為がいかなる「配列」あるいは「範列」として生じるかという論究へと展開する可能性も視野に入れるべきではないか、バチウの思想や実践を「私性」において捉えるだけでなく、それをファシズム世界にたいする社会民主主義的な「公」のあり方との接点において捉える視点はないか、「地方的なコスモポリタニズム」という規定の内実をさらに議論すべきではな

いか、「世界文学」が前提とする「世界＝普遍性」（ユニヴァーサルティ）にかわる、（グリッサンのいう）〈カオス世界〉〈反響-世界〉における「横断性」（トランスヴァーサルティ）の理論をより創造的に組み込むべきではないか、といった審査委員各人からの意見である。これらにたいして、阪本氏は本論文のいくつかの問題点をはっきりと認識しつつ適切に応答し、ここでの達成をあらたな出発点として、さらにより精緻で多角的なバチウをめぐるモノグラフの探究と、バチウによって促された、文学を媒介としてあらたな社会性や意識の連帯を創造してゆく文化活動への着手という明確な将来展望を語った。

以上の最終審査において、阪本氏が、論文において展開された事象と方法論を深く咀嚼・内化し、それにもとづく水準の高い論考を書き上げることに成功し、今後はみずからの言語と行動に明確な目的意識と倫理的責任を持って研究者・文化活動者としての道を歩もうとしていることが審査委員全員によって確認された。

これをもって、審査委員全員は、阪本氏の論文が、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであることを全員一致で決定した。